僕は、残りごはんが入った茶碗に番茶を注ぎながら、心の中で兄貴に言った、
「兄貴、オメデトウ、よかったなあ。」
体をゆさぶる波が、一瞬にして僕の手を固くして、茶漬けごはんを食べようとする手が動かなくなった。
しかし、誰にも言わなかった。
しばらくして、興奮がさめ、皆、落ち着いて来たとき、兄貴の得意顔が僕の頭に浮かんで来た。
まだ、結果もまだわかっていないのに、偉そうに口をたたいていた兄貴の態度を思い出した。
何度、その鼻を僕はへし折りたい気持ちに僕は捕らわれたか、わからない。
しかし、それよりも、もし、すべったら、兄貴が、皆の前でどんな顔をするか、心配だった。
「やはり、兄貴は、絶対、合格してほしい。」
といつも、思っていた。
「兄貴、オメデトウ。」と、何回も心の中で言った。
めしの後、自転車で本町のおばとこへ行った。
「兄ちゃん、京大合格したよ」と言うと、
「兄ちゃん、うかったか。よかったなあ。」
と、おばも喜んでくれた。
百円もろた。

83 兄貴、オメデトウ・・・・・・・・・・・・・366

萩原良昭